

## 鳴滝藤ノ木古墳調査報告

熊井 亮介

### 1. はじめに

本件は、京都市に寄託された須恵器とその出土地点について資料紹介を行う。

出土地点は右京区鳴滝藤ノ木町3-4で、御室川の西岸、音戸山から御室川に向かって下る低位段丘上に位置する。本調査地を含む「嵯峨野」や「太秦」と呼ばれる範囲では、これまで170基以上の古墳が確認されており、京都市内でも古墳が多く分布する地域として古くから注目されてきた。周辺では、西方には三瓦古墳群、南方には常盤東ノ町古墳群等が確認されていたが、本

調査地付近ではこれまで遺跡の存在が知られていなかった。

しかし、過去に出土した須恵器2点が平成26年に京都市に寄付され、当該地に遺跡が存在する可能性が高まった。今回、これを受けて現状の確認と聞き取り調査を実施した。調査は、平成30年12月18日に実施した。

なお、調査成果より出土遺物は古墳に帰属する可能性が高いと考えられることから、以下、本件について鳴滝藤ノ木古墳と呼称する。

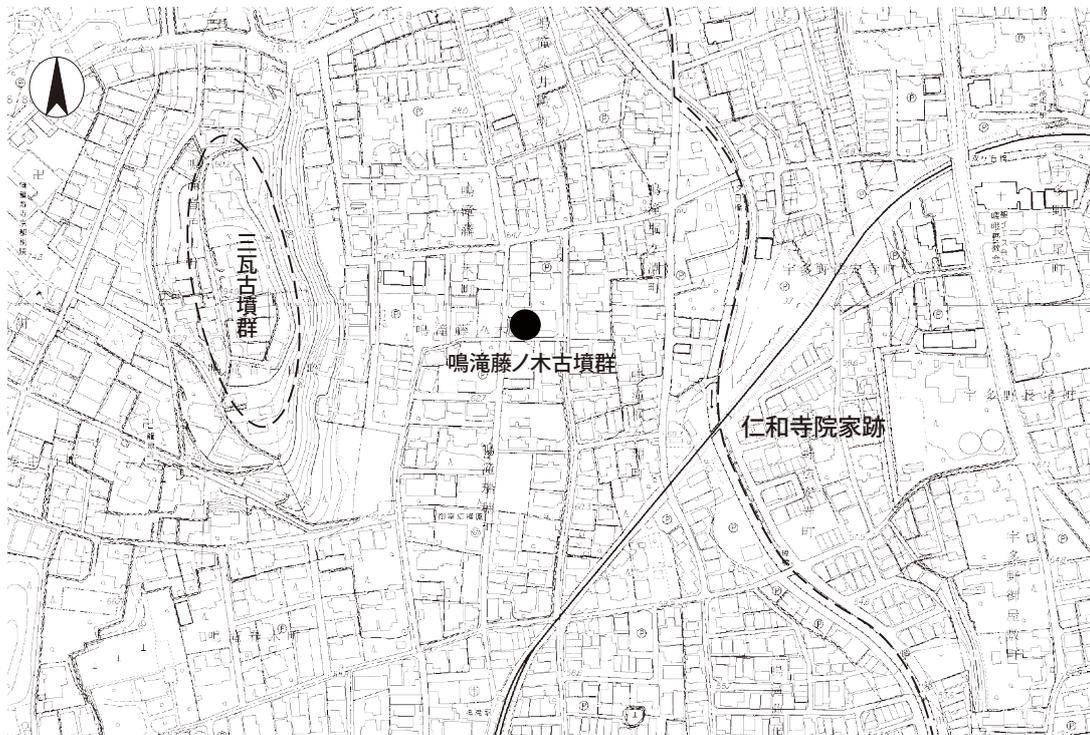


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

図2 現況平面図 (1 : 300)

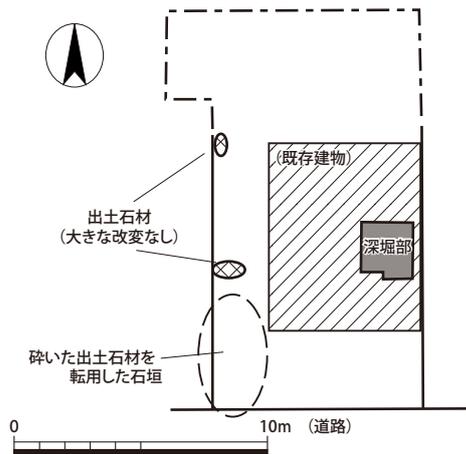


図2 現況平面図 (1 : 300)



写真1 出土石材 (南から)

## 2. 現地確認および聞き取り調査 (図1・2, 写真1)

現在、調査地周辺は住宅街であり、出土地点には寄託者の住宅が現存している。この須恵器が出土したのは今から約30年前の既存住宅の新築時で、住宅南東隅の掘削深度が最も深い場所から巨石とともに出土したとのことである。この深掘部は人力で掘削を行っており、掘方の下端は2.5m四方、上端は3~4m四方程度と推測される。須恵器は4石の巨石とともに出土したが、この石材は掘方の南壁にまとまっており他の部分では確認できず、また遺物は須恵器2点のほかには出土しなかったとのことである。なお、出土石材のうち2石は砕いて石垣に用い、残りの2石については現在も玄関前や庭に据えている。石材は入口のものが長軸約1mで高さ約0.6m以上、庭のものが長軸1mで高さが0.25m以上の規模を有しており、いずれもチャートとみられる。

## 3. 出土遺物 (図4, 写真2・3)

出土した遺物は2点のみであり、いずれも須恵器である。

1は広口壺である。底部が欠損しているが、それ以外の部分は良好に遺存している。口径と体部径はともに15.6cm、高さは17.5cmで焼成は硬質である。口縁部は上方にむかって外反し、端部付近で外側に向かって屈曲する。口縁部端面はロクロナデによって面をなすが、上稜と下稜はともにそれほど突出しない。頸部はロクロナデが施され、中位には幅2mmほどの沈線が2本巡る。内面には、体部と頸部の境界で粘土の接合痕跡が確認できる。体部はやや肩が張り、体部の上半のみカキメが施される。下半はカキメの上からロクロケズリが施されている。内面は底面付近のみ右下がりもしくは横方向のナデが認められる。2は脚付椀である。焼成が甘く灰白色を呈しており、全体が摩耗している。口径は14.8cmで器高は7.6cmである。体部には幅4mmの沈線が2本確認できる。内面の脚部の付け根付近には、接合痕が認められ

る。脚部は体部に比べ小振りで、外に向かって「ハ」字形にのびる。端面は丸くおさめる。これらの須恵器はいずれも古墳時代後期の所産と考えられる。

#### 4. まとめ

以上、本市に寄付された須恵器とその出土状況について報告を行った。これらの情報を総合すると、当該地には古墳が存在した可能性が高いものと考えられる。

いわゆる「嵯峨野」や「太秦」と呼ばれる範囲は、京都市内で屈指の古墳が集中する地域であるが、これまでに確認されている古墳は全て古墳時代中期末以降に造営

されたものであり、これはこの地域を特色付ける。これらの古墳は、墳形やその規模により立地が異なることが指摘されており、前方後円墳が扇状地、大形円墳・中型円墳・中型方墳が低位段丘上、小型円墳・小型方墳が低位段丘～嵯峨野北方の丘陵に分布する傾向が強い<sup>1)</sup>。この傾向や周辺の古墳を参考にするならば、当該地には中～小型の古墳群の存在が想定される。また、周辺域の古墳が南に開口することが多いことを踏まえるならば、今回確認した石材は横穴式石室の袖部もしくは奥壁部に当たる可能性がある。

当該地付近ではこれまで古墳の存在は知られておらず、明治・大正期の地図などに

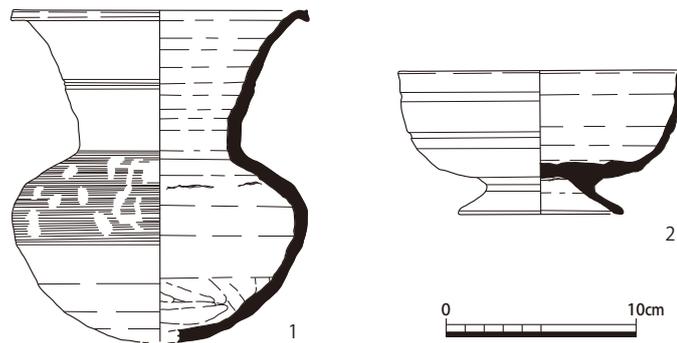


図4 出土須恵器実測図（1：4）



写真2 広口壺



写真3 脚付椀

もその痕跡は確認できない。情報が全くなかった地点において古墳の存在を示す資料を確認できたことは重要な成果といえる。ただし、不明な点も多く残されており、今後の継続的な調査が望まれる。

註

- 1) 和田晴吾「嵯峨野古墳群—考古学から見た洛西—」『洛西探訪 京都文化の再発見』1990年。

くまい りょうすけ  
熊井 亮介 (文化財保護課 文化財保護技師 (埋蔵文化財担当))